

# 記念誌 「高岡短期大学二十二年の歩み」 発刊記念座談会

日 時 平成17年2月25日(金) 14:00~16:30

場 所 高岡短期大学 大会議室

## 出席者

柳田 友道

(元富山大学短期高等教育機関(高岡)創設準備室長)

水島 和夫

(高岡短期大学 理事・第7代副学長)

徳平 滋

(高岡短期大学 初代副学長)

滝沢 浩

(高岡短期大学 理事・副学長)

麻生 三郎

(高岡短期大学 名誉教授)

三船 温尚

(高岡短期大学 教授)

澤本 正巳

(高岡短期大学 名誉教授)

舘 昌邦

(高岡短期大学 専攻科産業デザイン専攻2年生)

木村 幸信

(高岡短期大学 名誉教授)

工藤 桂子

(高岡短期大学 専攻科産業造形専攻1年生)

寺口 克己

(高岡短期大学 同窓会長)

明石 佳奈

(高岡短期大学 地域ビジネス学科2年生)

西頭 徳三

(高岡短期大学 第4代学長)

横田 勝

(高岡短期大学 教授(司会役))



## 1. 開会挨拶

**横田** 今日は皆様方、大変お忙しい中を、お越しいただきまして本当にありがとうございます。とりわけ徳平先生には埼玉県の所沢市からはるばるお越しいただきまして、非常にありがたいと感謝しております。また、柳田先生も富山市からお越しいただきまして、本当にありがとうございます。

はじめに、西頭学長からごあいさつのおことばをちょうだいしたいと思います。よろしく願いたします。

## 2. 学長挨拶

**西頭** ただいまご紹介いただきました西頭でございます。本日は大変お忙しいところ、ご出席を賜りまして、大変ありがとうございます。

すでにご案内のとおり、今年10月1日をもって、高岡短期大学は新しい富山大学の八つの学部の一つ、芸術文化学部になります。先ほど聞いたところによりますと、来月の初めに閣議決定されて、それから国会に上程ということになります。すでにスケジュールはどんどん進行しております。

そこで、先ほどごあいさつがありました横田先生を中心に、創設22周年の「高岡短期大学の歩み」という記念出版の話が持ちあがりました。やはり記念出版でございますので、創設以降今日までいろいろとご苦労なされた先生方、あるいは卒業生の皆さん、そしてまた、今日来ていただいておりますが、学生の皆さんの生の声を収録したいということになりました。つまり、今日の座談会はそういう流れの中で出てまいりました。

今日いろいろなお話が出と思いますが、私が気づいた点を一つだけご紹介いたします。昭和55年5月、約25～26年前でございますが、創設準備調査室が正式にスタートしております。本日ご出席賜っております当時の富山大学学長柳田先生がその室長にご就任いただいたということです。そこから現在の高岡短期大学の歩みが記録的には始まっているのですが、もう少し古い記録を見ますと、その20年前、昭和39年の5月、もう40年も前になりますが、富山大学の工学部と評議会が、高岡の地区にあった工学部を五福地区に移すという決議をしております。そのことが高岡短期大学の生まれる最も古い契機になったのだらうと、私は推測しております。それから、私はこちらへ参り、大変な紆余曲折や市民・関係者の皆様のご努力で、先ほど申し上げましたような準備室がスタートしたと聞いております。

今日は、創設当時のご苦労話やそれから途中で蠟山先



西頭徳三先生

生がお亡くなりになりましたことについて、水島副学長から伺いたいと思います。また、学生さんも来ていますので、現在の心境を語ってほしいと思います。できれば、過去・途中経過・現在・未来についても忌憚なくお話を伺えたらと思います。よろしく願いたします。

簡単ではございますが、ごあいさつに代えさせていただきます。

**横田** ありがとうございます。

初めにお断りさせていただきたいことがあります。今回の座談会にご出席いただく予定になっておりました本学第2代目学長の宮本匡章先生はご多忙のためどうしても日程の調整がつかず座談会をご欠席されることになりました。まことに残念ではありますがよろしくご了承のほど願いたします。

## 3. 出席者近況報告

**横田** 続きまして、高岡短大におきますいろいろな時代の、しかもいろいろな方面から非常に貴重な方々にご出席いただいておりますので、お一人ずつにつきまして現況をお聞かせいただけたらと思います。

まず、柳田先生からよろしく願いたします。

**柳田** 現況といいますと、皆さんと違って毎日日曜日でございます(笑)。大正3年生まれで、病気はいろいろやりましたけれども、皆何とか助かりました。だから、もう入院は何回やったか分からなくて、医療費は元を取っております(笑)。そういうことで、毎日元気でやっております。

専門は昔、微生物学をやっていたのですが、今は趣味をやっております、スタンドグラスやパソコンを楽しんでおります。

**徳平** 私はこの副学長につづいて国立の小山高専の校長になり、本学の3月31日の入学試験の追試験の最中に逃げ出したようなことになり申し訳ない気がしますが、ただ、転任先の学校の入学式を控えておりましたので、

どうしても行かなければいけないということで止むを得ないことでした。そこで8年間校長をやりまして、その後いろいろな話がありましたが、あとは自分の好きにさせてもらいたいということで、現在は毎日日曜日ということでした。

幸いなことに、高岡短大以降、一回も大きな病気はしておりません。現在は専ら孫の相手をして、孫といってももう大学院に2人と大学に2人行っておりますけれども、それを相手に勉強のしかたやものの考え方について議論して嫌がられておるかもわかりませんが、何とか若い連中がまともな人間になるようにするのが私の今の生きがいでございます。

**麻生** 私は毎日日曜日を送っているような状態でございますが、先ほども澤本先生から「きみは相変わらず若いな」と言われました。というのは、ご存じのように私は真っ黒の毛をしているのですが、決して染めてはおりません(笑)。これはどういうわけか、親のせいだったのですか、どうも白髪というのはまだ生えないのです。ということは、まだまだ少年、幼年になるのかなと、そういうふうに思っております。

その割には、体は丈夫かといいますとそうではないので、ここを退官したときからどうも体の調子がまずくなり、病院にしょっちゅう出たり入ったりしていたような始末でございまして、ここ2～3年は少し順調になっております。このまうまくやっけていけるのではないかなと、そういうふうに自分ながら頑張りたいと思っております。

そのようなわけで、私の大学時代の専門というのは、金工でございまして。金工というのはご承知のように地元といわゆる伝統産業で、もともと私の父親もそういう仕事をしていた関係で、跡を継いでやっていくのは宿命だというような形でやってきたわけですが、この大学に入りましてやはり金工を専攻にやっけてまいりました。

退官後も自分で何とかやっけていきたいと考えて、してはいたのですが、先ほども申し上げたように、どうも病にやられまして、つつい制作なり仕事のほうもどうもうまくいきませんで、今は少し柔らかに動いているという程度です。あまり無理するとまた病にやられますので、ひとつのんびりとやっけているような状態でございまして。以上のような現況でございまして。

**澤本** 20年前、私は、高岡短期大学における民間会社実務経験者第1号として任用されたのではなかるうかと思っております。その折は、横山初代学長と徳平初代副学長には大変お世話になりました。ありがとうございました。

今は、毎日が日曜日みたいなものですが、恥ずかしながら、老骨に鞭打って、週に1日だけ私立の短期大学の教壇に立っています。学校は私の立場をたてて客員教授

と呼称していますが、いうところの非常勤講師です。

家族から、「もう齢だし、辞めたらどうか」と言われていますが、私はせつかく声がかかるのだから、その期待に応えるのが当然と考え、客員教授を引き受けています。心のありようとしては、ボランティアの気持でやっています。何故、自分自身にボランティアといっているのかといいますと、つぎのような理由に基づきます。

かりに、若手教員の月給が30万円としますと、多分1年間の人件費が600万円ぐらいになるはずでございまして。私が、1授業科目を1年通してやっけたとしても35万円ぐらいでございまして。単純に考えて、1人の先生が17科目持てるはずがありません。「いま担当してもらっている授業は、余人をもってかえ難いので是非お願いします」との煽てにのって、学校経営上の遣り繰りをおもんばかり、客員教授をやっている次第です(笑)。学校で若者と接触させてもらっているせいか、お陰様でいたって健康です。

**木村** 私は、順当にいってれば約1年前、去年の3月末でこの高岡短期大学を停年退官するはずだったのですが、ところが、今紹介されました澤本先生が高岡短期大学でずっと頑張っておられますが、その高岡短期大学と同じ富山国際学園に所属する富山国際大学に、地域学部を作るので来ないかという話がありました。私は、高岡短大を作るというときもそうなのですが、新しいもの好きという悪い癖がありまして、二つ返事で飛んでいくことになりました。こちらは停年3年前に辞めるということになりました。当時の故蠟山学長からは、「おまえは、独立行政法人とか富山大学との統合合併とか、ややこしいことになりそうになったらさっさと逃げ出すんだな」とおしかりを被ったのですけれども、現在、その新しくできた地域学部で経営コースにおります。

工学部出身の私が、ほかの文科系出身の先生を差し置いて、経営管理論、経営情報論、経営科学、経営戦略論といった経営関係の授業科目ばかりやらされています。ここにいたときは澤本先生や滝沢先生がいらっしゃるので私も出る幕がなかったのですけれども、そういう新しいところでやっけていまして、何とか給料分だけの働きをしなければいけないと思って、頑張っている最中です。よろしく申し上げます。

**横田** どうもありがとうございました。

続きまして、第1期生の卒業生、同窓会長であります寺口さんをお願いしたいと思います。

**寺口** 寺口です。よろしくをお願いしたいと思います。

私は第1回の社会人入学生でありましたので、卒業後は元の職場である高岡市消防に復帰しました。現在は119番などの緊急通報を受けて消防隊に出動指令を行う部署にいますが、消防も世の中の例にならってIT化が進

んでいます。私のいる部署では情報管理や消防隊の出動管理など、私にとっては難しいデータベースの理論ばかりなのですが、在学中に情報処理を学んだお蔭で何とか上面ぐらいは理解できるかなという感じです。ですから、仕事に関していえば、今の情報化のスピードに遅れないようにと、気持ちだけが空回りしているような状況です。

**横田** どうもありがとうございました。

それでは、学内の方々に移りまして、お客様に対して簡単に現況をお話させていただきたいと思います。

**水島** 私は第7代の副学長でございまして、平成13年に就任したのですが、この4月で4年間と。3年半ぐらいまでやった人はおられるかと思えますけれども、いちばん長い副学長ではなかろうかなと思っておりません。この4年間の話はまた後ほどいたしますけれども、なかなか大変でございまして、現在、滝沢副学長とそれぞれ、私が総務担当、滝沢先生が財務あるいは入試・広報を分担しています。私の担当の中には統合の関係がございまして、この10月の統合を目指して、いろいろ大変な状況ということでございます。以上でございます。

**西頭** 私は平成15年11月1日付でこちらに参りました。前任地は愛媛大学でございます。たまたま富山県福光町出身ということで、こちらに参ることになりました。

現在、両副学長の協力のもとで、再編統合問題も順調に進んでおります。先ほども触れましたが、もうすぐ国会に上程されますので、4月下旬あるいは5月中には、新富山大学法人法が通ると思えます。そうなりますと、あとは一気に10月1日に向けて、積み残された課題、例えば学長をどうするかについて詰めて、10月1日を待つということになります。そういう意味でも、今後ともよろしく願いいたします。

**滝沢** 私は、平成5年に2代目の宮本学長のときに、経済・経営系の教員として着任しました。初代の横山学長と親しい阿部統先生(東工大名誉教授)と、東京で縁があり、高岡短大のことは存じていました。阿部先生は、初め自分が学長候補として打診されたが、事情があり、親友の横山保氏を推薦したのです、と後に語って居られました。

着任当時は、宮本学長が専攻科を当時の1年制から2年制へと改革し、合せて専攻科棟を建設することに注力されていました。そのために、中堅教員のパワーを集結する運営をされていたことが思い出されます。

私は、経営実務専攻のリーダーであった石井先生(名誉教授・商学)やここにおられる木村先生(当時の学科長)など良い先輩に恵まれ、また良い学生に恵まれて楽しく過ごしてきました。

昨年4月に、理事となり、組織運営にかかわり、特に新芸術文化学部発足の準備に広報面で努力しているのが

現状です。

**三船** 三船です。私は、ここにあります本学における在籍期間の表を見ますと最長不倒距離で(笑)、この3月31日で20年間、この高岡短期大学に在籍することになります。振り返ってみますと、非常に短いというか、あっという間だったというのが正直なところなんです。20年という長いように思うのですけれども、私にとりましては非常に短い20年だったと思います。

現況ということですが、私は今日も午前中、鑄造室で作業着に着替えて学生の鑄造をやっておりました。昭和60年の準備室にいた期間以外、それ以降はほとんど、ふだんは作業着で、鑄造室で学生と一緒に鑄造しているという、そういう繰り返しで20年がたちました。

簡単ですけれども。

**横田** どうもありがとうございました。

続きまして、学生さんにも簡単な自己紹介をお願いします。

**舘** 産業デザイン専攻デザイン科の舘昌邦です。今日はよろしく申し上げます。

今、卒業制作の最終発表も終わったのですが、すごくやりたいことがいっぱいありまして、毎日が卒業制作みたいな感じの忙しさなんです。簡単に学生生活を言いますと、高岡短期大学の2年間で楽しむデザインというのを学びまして、専攻科でデザインを考えるとということ、制作プロセスなど、そういうことを学びました。就職が京都の島津製作所に決まって、最後にいい結果が出たという感じです。以上です。

**工藤** 専攻科産業造形専攻1年の工藤桂子です。よろしく申し上げます。本科では産業造形の金属を学びまして、そこで鉄などの溶接に興味を持ちましたので、専攻科に行って鉄の溶接などをしております。

勉強が苦手なもので、どちらかというとサークル活動に走ってしまっているのですが、現在のところ、バスケット部と、YOSAKOI部と、もう引き継ぎをしたのですが、学生会のほうで昨年は副会長をしていました。高岡に来て、現在一人暮らしをしているので、不安なこととかもいっぱいあるのですが、この学校に来て毎日楽しい学生生活を送っています。以上です。

**明石** 地域ビジネス学科2年の明石です。よろしく申し上げます。私はおとし、経営を勉強したくてこちらの大学に入りました。今後は東京の大学に編入学が決まりまして、4月からは新たな、東京という富山と比べると人がいっぱい出るので不安もあつたり、ずっと富山県に住んでいましたので、富山弁が抜けなくて心配ですけれども、新しい地で頑張って経営の勉強、会計の勉強をしていきたいと思っています。よろしく申し上げます。

横田 どうもありがとうございます。

3人の学生さんは学生会の代表としてこの席に来ていただいているのですが、おおむね高岡短大の生活に満足しておられるように感じました。皆さん方が学園生活を楽しんでおられるその背景には、この高岡短大の歴史、22年間、創設の段階からいろいろな方面の方々のご尽力があったわけです。例えば、当然日本国、文部省に代表されるように、その支持がなければ当然生まれなかった。と同時に、地方自治体の、例えば富山県や地元高岡市など地方自治体の熱い声援・ご尽力があったことも事実だと思うのです。また、地元民間企業の方々、県民の皆さん、市民の皆さん、そういういろいろな方面からご尽力いただいた結果、この高岡短期大学ができたと思うのです。これを機会に、そういう長い22年間の歴史の中でいろいろな立場でご尽力いただいた先生方、先輩の皆さんから、どういういきさつで現在の高岡短大ができたかということ、とりあえず順を追ってお話を聞かせていただきたいと思います。



柳田友道先生

で、ほかの大学の工学部はどんどん学科増があったのですが、富山大学は移転問題があるということですので抑えられまして、富山大学の工学部というのは全国でいちばん小さい工学部という状態でした。

ちょうど学長に就任する前の年ぐらいから、県と高岡市がまず短大を作ってくれということを政府関係者に陳情しまして、綿貫さんや森さんなどの政治家も一生懸命にやってくれました。もちろん中沖知事もです。ところが、高岡市と富山大学、肝心の当事者どうしがうまくいっていないのです。高岡市長は堀さんという方でしたけれど、それまで学長が堀さんと話し合っていないのですよ。それがどうも僕には分からなかったので、私が学長になったときはこのところがいちばん重要だと思って、まず堀さんと話し合おうと考えました。

ところが、堀さんはそれまでにさんざん裏切られたというので文部省に不信感があるし、富山大学に対しても不信感を持っているし、もう話にならないので、私は学長になってすぐ、こちらから高岡詣でを繰り返しました。初めのうちは何を話していいのか分からなかったのですが、だんだんだんだん話しているうちに話が通じるようになって、1年ぐらいはかかっているのですけれども、雑談がどんどんできるようになりました。その間54年に、「短期高等教育機関(高岡)創設準備調査会」ができたのです。

その調査会は名古屋工大の佐野幸吉学長が座長でした。当時、高岡市の要求は、伝統工芸を大切にしたいということで、伝統工芸を中心にした短大を作りたいとい

#### 4. 本学に関する思い出

横田 最初に、高岡短期大学の創設の前後というのは非常に波乱に満ちた時代ではなかったかと思うのです。その中心となってご尽力いただきました先生として、柳田先生にその当時を振り返っていただきまして、高岡短期大学といえどもこういうことが思い出されるとか、何かお話がありましたらご紹介いただきたいと思います。けれども、よろしく願いいたします。

柳田 実は、すでにご依頼がございましたので、文章で「高岡短大創設期の思い出」というのを書いて、『高岡短期大学十年史』に出しましたので、細かいことはそれを見ていただければいいと思います。ここでは私が創設時代に味わいました主な点をかいつまんで申し上げます。

まず、高岡短大の創設の動機になったのが富山大学工学部の移転問題でございまして、これは昭和41年に評議会決定ということになっています。その後、十数年も決まらずに、その間に学長が何代か交代しておりました。結局、そのころは経済の高度成長期にもかかったわけ

主な役員員の在任期間

年度	S.55	56	57	58	59	60	61	62	63	H.元	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	
創設準備調査室長 /準備室長	柳田友道																										
学長				横山保																							
副学長				徳平 滋																							
事務部長				江田晴夫																							
産業工芸/ 産業造形学科長				中川 宏																							
産業デザイン学科長				横田 勝																							
産業情報/ 地域ビジネス学科長				澤本正巳																							

う話だったので、佐野さんから私に伝統工芸を中心とした産業について調べてくれという諮問がありましたので、私は早速協議会を作りまして、芸大の先生4人と、小倉玄吾さんという富山大学の漆の先生と、高岡の鍍金の可西さん、それから宮崎辰兎さんという井波の彫刻の人、こういう人に数人集まってもらって議論しました。これが、高岡短大を作るときのいちばん核になった議論のような感じがします。

そこでいちばん議題になったのが伝統ということでした。伝統のことについては、『高岡短期大学十年史』にも書きましたけれども、結局、前田泰次さんの『現代の工芸』という本の中に立派な伝統ということについての記載がありまして、この線でいこうということになりました。要するに、伝統というのは昔からのものをただ守り続けるのではなくて、新しい概念をどんどん入れていくのが重要なのだという筋です。この考えはどうしても取り入れたいと考えたのですが、短大はたった2年ですので、伝統というのを学科目の名前に入れるほどの教育はできないだろう。だから、伝統という字は取ってしまっ、て、工芸を主にした名前をつけようということになりました。

4年制の大学では作家の養成が主なのですが、この大学では作家は無理と考えられるので、職人を育てると。職人すなわち技術者ですが、職人を育てるような大学という筋でいこうということが決まりました。

55年に私は創設準備調査室の室長になりましたが、高岡市の伝統工芸界の方々に集まっていたいただいて、皆さんの意見を聞く会をやりましたところ、皆さん熱心にやってくださいました。そして彼らがいちばん希望するのはデザインでした。つまり、技術は短大でも教えてくれるだろうから、デザインのところをいちばん力を入れて教育してくれということでした。さらに卒業生は必ず引き受けますとはっきり言ってくれたのですけれども、その後どうなったか知りません(笑)。

私は微生物学者なので芸術のことは何も知らないわけですから、これは本当に面食らったわけです。とにかく現場を見ることとし、輪島の漆のセンターがへ行って漆の名家の先生方のお話を聞いて、それから井波に行ってお話を聞いたり、高岡を回って見学したりしました。でも本当に面白かったですね(笑)。こんな楽しい世の中があったのかということを知りました。

こういう見学出張には小林武さんという事務官がついてきてくれました。彼が細かく、漆産業はどういう部屋でやるのか、周りにほりか立ってはいけな、だから木工の部屋が隣にあってはいけな。それから、漆を作るにはどんな道具が要る、彫刻には彫刻刀が何本ぐらい



創設準備室のスタッフ一同

要るかなど、計算まで全部やってくれました。こうしてこの55年でいろいろと固まってきたと思います。

57年になりますと創設準備会議というのが文部省にできまして、そこで、3学科6専攻2コース、入学定員225人という線がまず打ち出されました。ところが、1年たったあとの会議では、2学科7専攻2コースで入学定員200人ということになり、これで形が決まりました。その後、富山大学にも委員会を作りまして、もう一つの経営・経済の関係の方のことについて提案しました。

高岡短大の設置場所については57年の8月に二上地区に立地するということが決まりました。これは文部省の国立大学統合整備等連絡協議会で決まりました。これも、初めは高岡の工学部の跡地に作ろうかという案があったのですが、あそこの敷地内には鉄道が通っていて、そんな場所に短大を作るのはおかしい。もっといい所があるはずだということで、高岡市の堀さんを中心に二上地区の案が出されました。

ここでいちばん問題になったのは、この隣に下水処理場を作るという案があったことでした。しかしその下水処理場の上は公園にしてしまうと、臭気は絶対出さないということでしたので、初め反対していた文部省にも十分理解を得ました。

もう一つ、伏木にパルプ工場があって毎年毎年夏になると臭気がするので、それが学校の方に来るのでは困るということでした。そこで1年間の風向きを調べたところ、学校はほとんど風上に当たるとことが分かって、これも文部省が納得してくれました。

実際に来てみると、後ろには二上山があって、とてもいい所で、土地も安く、この二上地区が決まりました。

その後も準備が進んでいって、58年にいよいよ学長を決める段階になってまいりまして、横山学長さんが候補者に上がったわけです。横山先生は東大の数学科を出て阪大の経済の教授になっているということで、非常にユニークな方だということに目をつけました。それと、かなり多面的な活動をやってらっしゃるということで、この方が候補に上がったのです。しかし、実はその前に、工芸関係を主目的にした大学というふう考えていたの

で、工芸関係の先生を学長にするか、それとも経済系の先生を学長にするかというので、いろいろと議論がありました。

そうすると、工芸関係というのはいわば芸術家なので、芸術家というのには管理職には向かないのではないかと皆さんもそう考えて、やはり学長は経済系の先生がいいのではないかとということで横山さんが挙がってきたのです。私は東京神田の学生会館でお目にかかって、もうすっかり気に入ってしまいました。それで皆さんに報告して、皆さんの了解も得られて、横山さんをお願いして、引受けて下さったのです。

横山さんは、最初は富山大学高岡短期大学創設準備室長になったわけです。私は室長職を解かれ、ようやく自由の身になれたわけです。そのあとは横山さんのお手伝いをやったわけです。その前に、ここにおられる麻生先生の採用人事というのは、私の準備室の時代にやらせていただきました。麻生先生は高岡の工芸高校の先生をやっておられたわけですが、あれはすごい学校なのですね。大先輩の偉い先生が大勢いらっしゃって、美術館みたいなものがあるのです。

**麻生** 青井記念館美術館です。

**柳田** その青井記念館美術館に行ってみるとすごい作品がぞろぞろあるのですが、そういう学校の先生をやっておられる麻生先生にぜひお願いするということになりました。

それと、私がもう一つお手伝いしたのは、横山さんが学長になってから、デザインの黒岩先生をお招きしたことです。黒岩先生は旭川の東海大学芸術学部におられたので私は旭川まで行って、向こうの学長を談判してきたのです。そうしたら、だめだということです。向こうで困るというので、この問題はかなり時間がかかってしまいました。結局、説得に説得を重ねて黒岩先生の割愛要求が成立しました。

私が関係した人事はお二人でございます。そういうことで終わります。

**横田** どうもありがとうございました。私も大学の創設直前の状況はほとんど存じていなかったのですが、非常にリアルにお話ししていただきまして、現実のものかなり出てきたような気がいたします。ありがとうございました。

続きまして、ただ今のお話で、初代学長横山先生のお名前が出てきたのですが、柳田先生がこの高岡短期大学の誕生に際して産婆さんの役目をしていただいたのかと思います。その高岡短大ができ上がったのは、横山先生が父親であるとするれば、初代副学長の徳平先生が女房役というような形で、最初の時期というのは大変だっ



徳平 滋先生

ただろうと。時には亭主よりも女房のほうが大変なこともあるかと思いますが、その辺のところを、先生、何か思い出話でもありましたら、ぜひお聞かせいただきたいと思います。

**徳平** 私が副学長として参りましたのは、59年の7月で、4月1日からという話もあったのですが、私は公立学校共済組合の理事をやっております、その担当は財務と労務でした。当時は労働組合が非常に強く、春闘の徹夜交渉が続いている最中に抜けられないものですから、その春闘が片付いてからということで7月1日にさせていただいたわけです。

富山駅の前に高志会館というのがありますが、あれは公立共済組合のもので、その建て替えの陳情を当時の中沖知事さん等から受けていて、県当局の方々を全然知らないわけではなかったということで若干役に立ったと思われまます。

ユニークな短大ができる、こういう構想だということを横山学長から事前に説明をうけ、私も勉強してここに来たわけですが、直接関係する人に会って話をすると分かるのです。私の知人が若干この地元において、また青年会議所その他にもいたものですから、そういう人たちと話をしてみると、短期大学ができるということは知っていて、それは非常に喜ばしいということでした。ただ、その内容はどのようなものかというのは、よく分かっていないのです。世の中のいろいろな事柄が進むときというものはこういうものなのだと感じました。

まず、ユニークな考え方というのはどこがユニークなのか、何がユニークなのかということを経元の人に理解してもらうことが大切なことと感じ、そのことを最初にしました。そのために、教育委員会の人とか高等学校長会等と話し合いを続けて、さらに、実際に学生を送り出してくれる高等学校の先生方によく分かってもらわないと困るので県下の東部地区と西部地区の高等学校の進路指導の先生方にそれぞれ集まってもらって、入学者選抜の方法についての説明をするとともに、大学のユニーク

な考え方や構想等についても詳しく説明するなどいたしました。中身をまず知ってもらわないと、入ってきたら違っていたということでは困るものですから。それから、青年会議所の人たちがいろいろ高岡のことをやりたいということで声をかけてくれたものですから、その会合にはしょっちゅう出ていろいろな話をするなどして、直接の関係者以外の人に大学の中身を知ってもらうように努めました。

もう一つは、私が赴任したときには、教官は横山学長と麻生先生と黒岩先生の3人でしたので、横山学長といろいろ話しながら、結局何をするかというと、教員を集めることだということになりました。どんなユニークな考え方を持って組織を作っても、それを動かすのは人ですから、人間の営みというものを大切に考えなければ実際のことはできないということで、あらゆるつてを使っていろいろな人の意見を聞きました。特に当時ありました運営委員会の先生方、それから地元の工業界や、鋳物、それから井波の、そういうところのいろいろな人たちに会って考え方を聞いて廻りました。先ほど柳田先生がおっしゃったのですが、学校というところは職人を作る施設ではないので、その基礎になるものの考え方なり見方なり方法論、勉強のしかたを教えて、本人がやる気になってそれを伸ばしていけるような、その基礎を作るところから。そういうことでいろいろな話をいろいろな先生方として、翌年の10月に、運営委員会に人事委員会というのを作ってもらって、その責任者に私になって、そして具体的な教官の選考に入っていったのです。

そのときに、当時、富山大学の図書館長をされていた平田純先生や、阪大の基礎工学部長の藤澤俊男先生、東京芸大の西大由先生、この3人の先生方には大変お世話になりました特に工学関係、デザイン関係には私はあまり縁がなかったものですから、西先生には大変お世話になりました。西先生は東京芸大の教授であられて、当時学生部長の職にあり、「副学長、一人一人廻るのは大変だから、私が世話してあげましょう」と言って、芸大出身者を東京芸大に集めてくれたうえ、学生部長室を提供しますということで、その室で10名位の人々を順番に一人一人面談することができました。そのときに先生がおっしゃったのは、専門的なことについては私が責任を持ちましょうと。だけど、人物や教育に対する考え方というのは、やはり副学長自身の目で確かめてくださいよということでした。

そのほか、現職のある人たちについては上司の方々にあいさつにも行くし、先ほど先生がおっしゃったように割愛してくれるかどうか、それから、職場での評価というものはやはり参考になりますから聞かなければいけな

い。そういうことで、随分人集めのためには飛んで歩いたということがいちばん思い出に残ることです。それでも、やはり大学設置委員会の教官審査の認可が出るまでは、こちらがかってに決めたものが果たして可となるのかどうかという、その心配は大変でした。今度振り返ってみますと、その辺が苦しくもあり、また非常に楽しい思い出ということになります。以上でございます。

**横田** どうもありがとうございます。

先ほどから、初代学長横山先生のお名前が出てまいりましたけれども、残念ながら横山先生はご逝去なさっております。その当時の横山先生の人となり、どのような方だったかということをお聞きせ願いたいと思うのですが、澤本先生、いかがなものでしょうか。

**澤本** 私が高岡短期大学へ赴任したのは昭和60年4月1日、仮校舎になっておりました富山大学の旧工学部です。すでに学科構成がきまっております。私が所属する産業情報学科には三つの専攻があり、私は経営実務専攻、木村先生は情報処理専攻そして石井先生はビジネス外語専攻を担当することになりました。むこう1年間で、二上キャンパスへ移転するための準備や翌年4月に第1期生を受け入れるための準備にとりかかったわけです。

秋ごろだったと思いますが、横山学長が私達のいる部屋へこられ「この3人の中からだれか1人学科の責任者になってもらわなくてはいけない」というのは「澤本先生どうでしょう」と鉾先がこちらへむけられました。「私は、いままで高等教育機関で勉強してきたものではありませんから不適任です」といって固辞いたしました。学長が部屋を出ていかれた後、木村・石井両先生から「全面的にバックアップするから学科長をうけたらどうですか、年長者からやるのが順序です」という話があり、結果的に学科長をうけることにしました。

仮校舎にいた間は、各専攻それぞれ責任を持って準備をしておりましたので、学科長として職責を果たさなければならぬということは全くありませんでした。二上キャンパスへ移転してからは、開学してから間もないということもあり、いろいろの問題がでてきました。学科会議もその一つでした。会議の席上先生方から、もうそろそろ研究紀要をだしたらどうか、校内LANは何時から設置するのか、あるいは外国出張の旅費は確保してあるのか等々の問題が提起されましたが、いかんせん私にはそれに答えるだけの知恵や抱負経験もありません。学長のところへ行って、以上のことについて詳細に申しあげました。学長から「学科内で処理できることはどんどん処理し、他方で先生方の意見を吸い上げることはとても大切であるので、いまのような姿勢でこれからもやっていって欲しい」と逆に慰められ、かえって恐縮してし



澤本正巳先生

まいました。あるとき学長に「産業情報学科の会議にで  
ていただいて先生方と懇談形式で話し合ってもらうこと  
も有効だと思いますが」と言いましたら「分った。いいよ。」  
ということで何回か顔をだしてもらいました。学長と産  
業情報学科の先生方との間でコミュニケーションがとれ  
たという意味では、大変よかったと思っています。

あるとき、学科の先生方が、事務スタッフの人たちに  
対してある種の不信感をもっていることが分かりまし  
た。こんな状態を放置してはいけなと思い、事務  
部長にお願いして会議に出てもらい意見交換をしてもら  
いました。時にはかんかんがくがくの議論になることも  
ありましたが、お互いの真意を知ることができてよかつ  
たと思っています。

学科長になってから1年間ぐらひは、以上のようなこ  
とで、横山学長をはじめとして各先生方や事務部長の助  
けを借りて、大変頼りない学科長でしたが、どうにかか  
ろうじてその責を果たさせていただくことができました。

**横田** どうもありがとうございます。

実を申しますと、澤本先生に横山初代学長の別の形の  
ことを、話題を聞かせていただきたかったのですが。

**澤本** 洗心苑は横山学長の肝いりでできた施設だと思  
います。宿泊施設がありますので、開放センターとタイア  
ップして、企業のマネジャーに対する2泊3日の開放講座を  
何回かやらせてもらいました。それ以外、教官同士の娯  
楽として囲碁やカラオケやマージャンを楽しむために  
利用しました。

1日の業務が終り、ホッとした気分で、研究室の窓ご  
しに暮れなずむ様子を眺めていると「横山学長が洗心苑  
で夕食を一緒にしようと言っておられますがどうです  
か」と庶務課から声がかかります。そんなことが、  
しばしばありましたが、毎回OKとって学長のご相  
伴をうけることにしていました。

夕食会が済んだあと、横山学長から「これからマージ  
ャンをやろうじゃないか」との提案で、しばらく楽しい一

時を過ごすわけですが、なぜか私が相手のときは、横  
山学長が勝たれたためしがありません。そして、最後に「澤  
本先生は勘がいいから、どうも勝てないな」と愚痴られ  
るのが常でした。

第1回選抜入学試験の競争倍率の予測で、私が出した  
数値が実態に最も近似していたということがあり、その  
ことが横山学長の脳裡にあって「勘がいいね」という言  
葉になったんだろうと思います。

あとで宮本先生(2代目学長)から「横山学長は、大阪  
大学時代負けるとぶら下って勝つまで止めないという癖  
があった」という話をききました(笑)。私がメンバーに  
入っているときは11時頃にやめ、ぶら下られたことは1  
回もありません。宮本先生の話を書いてから、あれだけ  
横山先生にいろいろなことを教えていただきながら、遊  
びとはいえ気の毒なことをしてしまったものだなと、後  
になって変な反省をしている次第です(笑)。

**横田** どうもありがとうございました。

木村先生は横山先生と宮本先生両方の代をまたいでお  
られるのですが、その辺、お二人について何か思い出で  
もありましたらご披露願いたいのですが。

**木村** 私は実は、横山先生にはずっと以前からお世話に  
なっていました。その縁でこちらへ連れてきていただ  
いたと思います。私の学生時代と助手時代を通じての恩師  
であり、後に東工大の学長もされた松田武彦先生と横山  
先生とが大の親友だったのですね。その関係があつて、  
横山先生が例えば企業人を相手にセミナーをやるときに  
私が呼び出されてお手伝いをするという形で、ずっと横  
山先生からも伯父さんのような形でお世話いただいでい  
ました。

私は神戸にいたのですが、あるとき一度会いたいから  
大阪へ出てこいという電話を頂いたのです。そのちょ  
っと前に情報処理関係の研究会の話を伺ったことがあつ  
たので、研究会を作る話だと思って、そのお約束の時間  
に大阪へ出向いたら、「きみ、わしが高岡短大の学長に  
なったのは知っているだろうね。いよいよ本格的に動き  
だすのだけれども、きみ、来ないかね」と(笑)。私も、  
「新しいのを作るのですね。それは面白そうですね」と  
言って、ほとんどのその場で承諾したみたいなのでし  
た。

それ以前のおつきあいでは、先ほど澤本先生からもご  
披露がされましたけれども、横山先生はとにかく大学関  
係者相手の席ではマージャンもトランプも絶対負けな  
い。絶対に負けないのはなぜかという、自分が勝つま  
でやめないと(笑)。ゴルフもそうですね。私もゴルフの  
お相手はちょっとしたことがあるのですが、マージャン  
だけは「できません、できません」と言ってご勘弁願

ました。

それで、横山先生の代に学科長の若返りということが出まして、工芸学科では蜷川先生が学科長になられて、産業情報学科はおまえやれということで、澤本初代学科長、石井2代目学科長に次いで3代目の学科長になりました。先輩お二人がレールを敷いているので大丈夫だろうと思っていたのですが、ちょうど私が学科長になった途端に横山先生の停年の時期が迫ってくる。それから、澤本先生と、私の恩師の一人である阿部先生と、哲学をやっておられた城村先生と、我々の関係だけでもその3人が停年退官される。それから、十年史をそろそろ作らなければいけないとか、開学10周年記念式典とか、それから、最初の卒業生が出るまでに専攻科も作らなければいけないということで、準備作業もやりました。また、開放授業の一環として、北日本放送のテレビで公開講座をやるという放送利用公開講座が始まって、そのまとめ役も学科長がやれということになりまして、もう非常に忙しい思いをしたのが印象に残っています。

宮本学長は阪大経済学部で横山先生の弟分みたいな存在で、そういう縁でこちらの学長になられました。いろいろ高岡短大の事情についてご下問いただいたりしてお話する機会が多かったのですが、教授会等で私が産業情報学科の利害を主張していろいろかみつくものですから、かなり宮本学長とは険悪な雰囲気になった時期もあります。例えば、今はどうか知りませんが、工芸の先生方が作品展示会をやるときに、開放授業の一環として会場費かパンフレット代でしたか、大学から補助してやろうということが決まっていたのです。それで私が教授会の席で「では産業情報学科の先生が個人で自費出版するときにも大学から援助をもらえるのですね」というようなことを言ったりと、私自身としては格差是正のつもりで随分逆らいました。

それから、かみついたといえ、徳平先生のときにはまだ私はそのような元気はなかったのですが、それ以降、水島副学長の前まで副学長いじめというのは随分やりました(笑)。というのは、副学長が開放センターの責任者なものですから、開放センターのことについて、規定と違うではないかなどしょっちゅう副学長室に怒鳴り込んだりして、何人かの副学長から文書つきで、自分が間違っていたという念書を頂いたこともあります。

あと、事務からも随分嫌がられたと思います。教授会の席上で、この漢字が違っているではないかとか、この文言はおかしいではないかと。あるときは文部省を通じて法務省まで問い合わせてくれた課長がいて、木村の言うことは合っているそうだとということで、わざわざそれを知らせにきてくれたまじめな庶務課長もいらっ



木村幸信先生

しゃいました。そういう、いろいろの面でひねくれ者ですから、横山先生はユニークな短期大学だから変なのが一人くらいいてもいいだろうと思って私に声をかけてくださったのだらうと思います。

**横田** どうもありがとうございました。

宮本学長に続きまして第3代の蠟山学長ということになりますけれども、蠟山学長はご存じのとおり不治の病で倒れられまして、特に大学の法人化や県内国立3大学の再編統合ということで相当ご尽力されてきたわけです。

そういう非常に厳しい状況におきます女房役としましては、初めは行田先生、後半は、現在もそうですけれども、恐らく水島副学長は、蠟山前学長の女房役ということで比較的立場としては楽な状況ではなかったかと思いますが、突然の事態急変で、恐らく先頭に立たされて大変だったと思うのですが、そのあたりをぜひご披露したいと思います。いかがでしょうか。

**水島** 横田先生の今言われたとおりで、蠟山学長は大変有能な方であって、女房役としては、蠟山学長についていくということで、横田先生のおっしゃったのはあっていたかもしれません。

実際問題、ついていくというよりは蠟山学長からいろいろと教えていただきました。例えば大学の統合問題ですが、遠山プランということで、13年の6月に打ち出されて全国の大学が大騒ぎになったわけですが、その際蠟山学長は、遠山プランが示された国立大学長会議の帰りの列車の中で富山医科薬科大学の高久学長と同期して、「将来のことを考えたら、統合ということでいかなければいけない」と意気投合されたというような話を後から聞き、その後今日の3大学統合に至っているのですが、いろいろ蠟山学長から教えていただくことが非常に多かった。ついていくというよりも、むしろ教えていただいたというような感じであったと思います。

なお、先ほどマージャンの話が出ましたが、蠟山学長はスポーツ万能、食い道楽でもあられましたし、雑学など、何でも知っておられるという大変な方であっ



水島和夫先生

て、だれにもどの分野でも引けを取らないと自負されておられたのですが、マージャンだけは(笑)。例えば庶務課の歓送迎会などで、当初は民宿に泊まり込みでやっていた、それぐらいのんびりしていたということですが、宴会が終わったあとで、やろうかと学長自ら言い出されました。私なんか、自分でうまいと思ったことが一度もない、点数計算もできないほどですけども、蠟山学長に勝てるのですね(笑)。あれだけは学長も「水島君は強いね」などと言われました。ただ、先ほど「ぶら下がり」と言われましたけれども、「では、勝つまで」ということは、さすがにそこまではなかった。適度にされるというような感じであったと思います。

ちなみに、今の話は別として、テニスや登山、スキー、自転車など本当に万能で、少なくとも私が仕えた2年間のうちの最初の1年間は、多分高岡短期大学の先生方の中で一番アクティブな先生であったかと思っています。ですが、統合の関係や国立大学法人化の関係など、いろいろな事柄が最後の平成13年度から14年度の前半にかけて起きてしまって、なおかつ金融審議会など国の関係の仕事も14年度の夏ぐらいから大変忙しくて、そういう関係の過労がたまって、14年の秋、10月から入院となってしまいました。それから私は大変でございましたけれども、それまで1年半ぐらいいろいろ教えていただいておりますので、蠟山学長に比べると数分の1位の力しかなかったのですけれども、何とか学長の代理をやっていくことができましたと思っています。

**横田** どうもありがとうございます。

それでは西頭先生に、愛媛大学から学長として来ていただきまして、ご感想をお聞かせいただきたいのですけれども。

**西頭** 私は愛媛大では副学長をやっていましたので、総合大学というのは大体分かっているつもりだったのですが、校舎がきれいで、女子学生が多いのに非常に面食らいました。私がこちらに参りまして、まず水島先生と新学部設置の仕事をやってきたのですが、先ほど徳平先生

がおっしゃったように設置審について大変心配でした。三船先生なども大変苦勞されて、なるべく全員が資格審査を通ることに精力を注いできました。

もう1つは、これも徳平先生がおっしゃったことですが、大学は良い人材を集めることが大切です。学生も教官もです。私が来てからの前半は、人材集めというか教員選考に苦勞しました。いろいろな議論がございましたが、幸い今現段階では非常にいい先生方に来ていただけることになり、設置審も通りました。一人も脱落者が出なかったというのは、大変よかったですと思います。

それから、先ほど柳田先生のお話を聞きながら、なるほどなあと思ったことが二つあります。最も印象深いのは、まず現場に行ったということです。例えば能登の漆工房の見学に行ったとか、地元の人に直接話を聞くとか、そういうことをなされた。このことは私も大変重要と思っております、なるべく地元の方と話し合い、意見を聞きたいと思っています。

もう一つは、後でもし時間があれば詳しくお聞かせ願いたいのですが、高岡短期大学から芸術文化学部になる場合、大学の理念をどうするかという問題です。柳田先生は「伝統ということ」を再確認したとおっしゃいました。それは、前田泰次さんの本から導き出したということですね。というのは、先ほどの水島先生のお話にもありましたが、蠟山先生が中心となられた3大学の統合案が非常によくできているのです。ですから、私はほとんど苦勞することなく、事後処理的なことをやってきたというのが正直なところ。つまり、蠟山プランの新大学や新学部の理念が狂いのないものであったという気がしております。ただ、これから教育体制を具体的に作るのは、我々の責任と思っております。

**木村** 蠟山学長のことでこれだけは披露させていただきたいと思って来たのですが、4年前に富山国際大学に行きました。4月の終わりごろだったと思いますが、授業と授業の合間に事務室からいきなり電話がきまして、蠟山学長がお見えで応接室でお待ちですというので何事かと思って走って行きました。そうしたら、「この前の教授会であなたの名誉教授の称号が承認された。いろいろあるみたいだから、私が直接持ってきたよ」と。

いろいろというのは何かといいますと、教授会で通していただいた直後に、事務部からうちへ電話を頂いたのです。そのときは昼間で、もちろん私は留守ですから家内が電話を受けましたら、この前の教授会で名誉教授の称号を出すことにした、それを書いた置物があるから、いつでも都合のいいときにそれを取りに来るようにという電話だったのです。「はい、はい」と受けていればいいのに、うちの家内はまた、私の女房ですから、「名誉



滝沢 浩先生

教授はありがたいのですけれども、うちの主人がそんなものを受けるかどうか。まあ、本人が帰ってきましたら伝えておきます」と言って電話を切ったらしいのですね(笑)。それで多分蠟山先生は相当心配されて、あいつは変人だから断りかねない。自分が直接持っていったら、幾らひねくれ者でも断りようがないということで、事前に問い合わせ、私の授業時間割がどうなっているかまで調べて、私が必ず大学にいて空いている時間をちゃんと調べてからお見えになったのです。そういう、すごい心配りのできる方でした。お亡くなりになられたのは本当に惜しいと思っております。

**滝沢** 蠟山学長のことは、印象深いことがあります。

蠟山先生は、国の政策への貢献にくわえて、県や市の政策にも大きな貢献をされました。富山県の景観保全を図る県景観条例を決めた県審議会の会長であり、また高岡市と新湊市にまたがる路面電車(万葉線)を第3セクターの運営として存続する際にも万葉線懇話会の会長として、地域の合意形成に大きな貢献をされました。

私は、蠟山先生が学長候補の時点で、宮本学長から、貴方の大学同期の蠟山さんが来られる予定だが、彼はめっぽう議論に強いから、論争してもムダだよ、と言われた記憶があります。しかし、この万葉線の件では、敢えて学長室へ議論に行きました。

見解に一部違いがあるが、公共交通の復権が急務という点では考えが一緒だね、と話し合った思い出があります。

また、蠟山先生が特別講演のために呼んだ大原美術館理事長の大原謙一郎氏の講演当日に入院中で動けず、大原さんと私が病室にお邪魔しました。その際に、大原さんが素敵なお見舞いにお見舞いに渡され、先生が喜んでいた顔が思い浮かびます。

蠟山先生と大原さんは経済学部小宮隆太郎ゼミでの仲間、また私は、大原さんと教養学部時代の同級生であったということで、うち解けた会話ができた思いがあります。

**横田** どうもありがとうございました。



三船温尚先生

非常に貴重なお話をありがとうございました。それでは続きまして三船先生に、高岡短期大学にかかわりが非常に長く、現在も現役教師でおられるということで、初期から中期、現在まで、学生気質というもの20年間で何か変わってきているのかどうか。その辺、もし何か感想をお持ちでしたら紹介していただきたいのですけれども、どうでしょう。

**三船** 随分難しいご質問ですね(笑)。いきなりそういう質問だったのですけれども、学生気質につきましては、これは不思議なことを感じています。1期生が入ってきて、学外の方がいろいろと見学に来られ、学生が授業や実習を受けている姿を見て、ここの学生というのは非常に一生懸命やるねということを目撃されましたね。それから、素直な学生が多いねというようなこともおっしゃられました。

私は最初だったのでよく分からなかったのですが、どうもそのあとをずっと思い返してみても、私がかかわった学生というのは本当に一生懸命やる学生が多く、素直な学生が多かったように思います。それが先輩から後輩に伝わっていくのか、入るときにそういう学生がよりすぐられて入ってくるのか、実はよく分からないのですけれども、恐らく両方が作用しているのかなと思います。学生の先輩・後輩のつきあいなどを見ても、必ず先輩の影響が後輩に伝わっているようすし、ここの入試には面接もしておりますので、そういった意味で、やはりそういった資質を持った学生が選抜されて入ってきているのだらうと思っています。

それがこの20年間で変わってきたかと言われると、節目節目がないものですから、ずっと同じように流れてきたとしか実は思えないのです。1期生がそういった評価を受けたように、やはり今の学生も、これは学科に関係なく、素直で一生懸命取り組む学生が集まっていると思います。

**横田** どうもありがとうございました。そういう事情で、学生気質がよく分からないと(笑)。分からないので



寺口克己同窓会長

はなくて、その移り変わりが分からないと。

そういう観点から飛びまして、本学の第1期の卒業生であります寺口さんに。現在高岡市にお勤めで、同窓会をお世話になっており、高岡消防署関係で毎年いろいろお世話になっているのですけれども、寺口さんは第1期、学生時代を経験されているわけです。寺口さんの立場から見られて、近くて遠い、遠くて近いところから、年を追って高岡短期大学を見た場合、どのような感想をお持ちでしょうか。

寺口 同窓会発足当初から現在まで同窓会長をさせていただいていますが、最近是在学生の方と話をすることもありませんから、印象を訊かれても正直なところはきりとはいえませんね。

私が在学していたときも女性の人数を多く感じましたが、入学式や卒業式で拝見すると近年は一段と増えているように思います。

頑張り屋でしっかり者の女性がたくさんいらっしゃる印象はあります。

そして、今日出席されている3人の方々是人選されたのでしょうか、言葉にも態度にも自分の主張が感じられますので、先輩として大変心強く感心しておりました。そんなところでしょうか。

## 5. 新・富山大学「芸術文化学部」移行に向けての感想と激励

横田 それでは、予定時間が近づいておりますので、最後に麻生先生、出席していただいている方を代表して、今年の10月から新しい芸術文化学部として高岡短期大学が進化と言っているのでしょうか、移り変わるわけですが、そのような新しい大学に向けて何かエールを送っていただきたいと。何かごあいさつをお願いします。

麻生 私がこの短大に因縁ができたというのは、先ほど柳田先生がおっしゃったように、57年の秋だったと思



麻生三郎先生

います。5月には発令されていたのですけれども、それまでは、私の前身というのは、高岡の工芸高等学校の金工科という学科で教員をしていたわけです。それが、柳田先生をはじめ、私の仕事仲間といえますか、そういった先輩の方々から、「おまえ、今度高岡にできる大学の教員になってはどうか」という勧めといえますか、紹介といえますか、そういうものがありました。

それを聞いたときにはびっくりしました。私は単なる高校の一教員で、しかも専門の金工という狭い範囲のことだけしかやっていない人間が、大学の創設という重大な仕事に果たして間に合うのだろうか。それがあのときの実際の心情でした。それはだめだと。そんなことはとても私にはできやしないと断ったのですが、そのときは悩みましたね。とにかくどうすればいいのか、私に果たしてそんなことができるのだろうかということで、呆然として、何日か過ごしたことを覚えております。

先ほどの仕事関係の先輩の方々、金工作家の可西泰三さんや井波の彫刻家宮崎辰司先生といったの方々からも、いいチャンスではないかと。ぜひこの機会に、新大学だし、しかも中身はあなたのいちばん大好きな工芸関係ではないかと。そのような励ましの言葉といえますか、いろいろと激励を受けまして、悩んでいたことが「果たして…」というふうに徐々に考えるようになりました。何日間か悩んだ結果、そういった先輩方の励ましも含めて、ではひとつ思い切ってやってみようかという決断をして、57年の秋に柳田先生のほうへお伺いして、お受けすることになりました。

そもそも私の出発点、この短大とのかかわりというのは、そういう出発のしかたをしたわけですが、ただ、そのあと、61年の第1回の入学生を受け入れるまでの間というのは、とにかく自分では大変な期間だったなと思います。最初の専任教官ということで、私がかた一人だったわけです。そういう人間が、しかも専門は金属工芸という狭い範囲の人間が、情報関係も考え、漆やデザイン、木工といったすべての学科内容というものを



横田 勝先生

全部キャッチして、それをどのように盛り上げていくかという、いわゆるたたき台をどう作っていくかとなると、さすがに私もこれは難しい仕事だなと。果たしてこういうことがどこまで続くのだろうか。毎日が針のむしろの上に乗っているような状態だったかと思います。そのような関係もあったからか、その当時は体調を崩しまして、相当勤めのほうも欠勤したかと思います。

そのようなこともございましたが、幸い、すぐあと黒岩先生や三船先生に来ていただいたので、57、58、59年と、そういう先生方の力によりまして私も何とか持ちこたえるといえますか、何とかまともにやっていけるような体制になったかと思っております。

その期間がちょうどこの準備室の期間でございまして、実際に大学が始まって、本当の大学の仕事というのはそのあと入っていくわけですが、これは省略させていただきます。私と短大とのきっかけというのは、そういうことだったのではないかなと懐かしく思っているのですが、ただ、あの当時、いろいろ先生方にご迷惑をかけました。そういう意味では大変恵まれていたなど、自分の恵まれた状態というものに大変感謝しておりました。

それと、今、横田先生からおっしゃった、これからの新しい大学ですね。この短大ができたときというのは、やはり地元の声、何といっても地元の人たち、伝統産業に携わっている人たちの強い要望といえますか、そういうものが基本になっているわけですね。かつての高岡における高等教育というのは、当時は高岡に高等商業学校という形で経済専門の専門学校があったわけです。それが戦時中、工業高専に変わったわけです。そういうわけで、高等教育というのは、かつて昭和の初めからあったのですが、それが今度は富山大学に統一するという形になって、工業コースが工学部が変わって、それが今度また富山に集中するという形になったものですから、高岡には最高学府の高等教育がなくなってしまうという、そういうせば詰まったような感情が高岡の市民にあったと思います。だから、伝統工芸と同時に、最高学府とい



館 昌邦さん

うものをどうしても高岡に置きたいという熱望があったのが、このように短大設立に動いていったわけです。

そういうことから考えますと、今度新しい富山大学に統合されますが、やはり私は、短大の色彩といえますか、個性といえますか、いかに統合されてもしっかりと特質を持っていていただきたいということですね。先ほど職人かデザイナーかというお話も出ておりましたが、両方必要なのです。特に技術というのは技術者がいなくなってしまうと消えてしまうわけです。そういう意味では、特に私は技術という面、職人という形を、何とかしてどの学校にもないものをひとつ作り上げていただきたいということですね。それは、一方で停滞しますと、そのまま消えていってしまいます。だから、技術というのは絶対止めてはいけないわけです。これはぜひ、続けてやっていただきたいと考えております。

これからの新しい大学に対して、私の一つの願いを申し上げます。どうもありがとうございました。

**横田** どうもありがとうございました。新しい大学、学部に移るに当たって、麻生先生から非常に説得力のあるお言葉をちょうだいしまして、いろいろと参考になったかと思えます。

実を申しますと、この新しい学校に向けての励まし、ご忠告のことばを全員の方にお願ひする予定でございました。けれども、時間がありませんので、最後に、学生さんから後輩に向けて励ましの言葉を進呈していただきたいのです。よろしいですか。

**館** 今日、本当に多くの先輩方や先生方があって、今の自分があるのだなということを強く感じました。学生生活でいちばん感じたのが、本当にこの高岡短期大学というそのもの自体を知らない人がたくさんいたことです。就職活動でも自分が外に出ていかないと何も分からないという状況なので、後輩には、課外活動をもっと大事にしなければならぬということを言いたいと思います。

あと、新大学で、学部全体の横のつながりと、先生方を含めた縦のつながりをすごく大事にしてほしいなとい



工藤桂子さん

うことを、この4年間で感じたので、この会議において自分が出席するというのをこの言葉で締めくりたいと思います。どうもありがとうございました。

**工藤** 今、先輩の館さんが言ったように、私も同じことを感じたのですけれども、今の私がこの高岡短大の生活を楽しんでいるのは、今の皆様の努力などいろいろあったおかげだとしみじみ感じました。

現在、私はサークル活動のほうに力を入れています。学生会などの学校の行事を仕切っていくたり進めていくことで、さらに学生が楽しめるようにと考えてやってきましたのですけれども、この活動をしてきたおかげで今の私があるのだと思います。

私は造形の専攻なのですが、ビジネスのほうにもデザインのほうにも友達がいっぱいいるということをよく言われています。それは、今までの自分がやってきたサークル活動などがあるおかげで、さらにこの生活を楽しんでいると思いますので、これからの学生にも、自分だけのことでなくて、周りの人が何をやっているのかなという興味を持って、これからの高岡短大で生活していってほしいなと思います。以上です。

**明石** 今日は貴重なお話を大変ありがとうございました。

私は高岡短大に入学してからまだ2年しかたっておらず、皆さんのように何年間もこの大学に在るわけではないので、後輩にアドアイスというのはちょっと気が引けるのですけれども、自分の感想としては、私は高岡短期大学の生徒と教官の距離が近いところがすごく好きなのです。周りにはいろいろな大学に通っている人がいるのですけれども、高岡短期大学のように、こんなに近い距離に生徒と教官があるというのは、あまりないと思います。それはやはり小規模であるからということも一つの理由として挙げられると思うのですが、今後富山大学になったとしても、規模は大きくなりますが、大学に来る人の人数は少ないので、これからもずっと教官と生徒の距離が近い高岡短期大になってほしいと思



明石佳奈さん

います。

私は1年間、学生会の役員としてやってきたのですが、やはり短期大学というのは2年間なのでサークルの存続が難しいと思います。4年制になることで、またいろいろなサークルがどんどん活性化していくのではないかと、もう少しサークルにも力を入れてほしいなと思います。以上です。

## 6. 閉会挨拶

**横田** どうもありがとうございました。

それでは、予定の時刻を少々オーバーしております。そろそろ終わりにさせていただきたいのですが、滝沢副学長から閉会のごあいさつを兼ねましてお言葉を頂戴したいと存じます。

**滝沢** 本日は創設時の当事者から現役の学生の皆さんまで、多くの方から貴重なお話を伺うことができました。伝統工芸を中心にする大学、伝統とは新しく発展するもの、という創学の趣旨に関する柳田先生のお話は、地域貢献を狙う新学部の趣旨とも通じるお話で興味深く思いました。また、先生と学生の距離が近い学生生活だった、という在学生の想いは、新学部の学生にもぜひ引き継ぎたい校風だと思います。

本当に、数々の貴重なお話を、皆様ありがとうございました。

話しは尽きませんが、これで、座談会を、お開きにしたく思います。

**横田** それでは、どうもありがとうございました。

何分にも司会者としては全くの未経験者でして、多々ご迷惑をおかけしたかと思えます。どうかご容赦いただきたいと思えます。どうもありがとうございました。

では、これで終わりにさせていただきたいと思えます。

一同 どうもありがとうございました。